



能忍寺たより

行事紹介

○三社祭

三社祭は浅草で行われるお祭りです。今回は三社祭と仏教のつながりをご紹介します。今では浅草神社の最大の年間行事となっていますが、江戸時代は「観音祭」や「浅草祭」と呼ばれ、浅草寺と一体となったお祭りでした。平安時代から鎌倉時代にかけて、習合思想(日本の神は仏が姿を変えて現れたものだとする思想)が盛んになり、浅草寺と浅草神社は密接に結びついている状態でした。そのため浅草神社の前で浅草寺の僧侶が読経し祭りも行われていました。明治時代になり、政府により神仏分離令が命じられた後、浅草神社と称されるようになりました。当時は神輿をかつぎ回ることよりも各町で各々の勢いや絢爛さを競い合ったとも言われています。そして今でも姿を変えながら、浅草の初夏を象徴する大祭として賑わい、浅草には三社祭の四日間のうちに約180万人が訪れました。神輿には「一之宮」「二之宮」「三之宮」と三基があります。それぞれの基に裝飾やお神霊が違っているので、見比べてみるのも楽しいかもしれませんね。

今月のことば

知らぬが仏

目で見ても耳で聞くにしても、知るからこそ喜びや悲しみが入り交じり交互にやってくる。いつそ何も知らなければ、平静な心境で仏のようにおられるという戒め。事実を知ってしまったら、見てもいざ知らず、苦しみや悩みも起こりますが、知らなかったり見ないでいれば、腹が立ったり、怒ったり、心が乱れることは起きないこともあります。しかし、逆の意味で「聞くは一時の恥、知らぬは一生の恥」ということわざもあります。これは知らないままの状態は恥ずかしいことなので、積極的に質問することがよいという戒めです。なかなか加減が難しいですが、何事もほどほどが良いですね。

コラム あれもこれも仏教用語

〇ANUNJAY

思わず口から出てしまふときもある「どっこいしょ」という言葉ですが、こちらも仏教用語が由来という説があります。元は「六根清浄(ろっこんしょうじょう)」といい、欲や迷いを断ち切つて心身が清らかなることを意味します。「六根」とは眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根の六つの感覚のことを指し、「こころから私欲や煩惱、迷いが引き起こされるとなるとなりました。「清浄」は煩惱や私欲から遠ざかり、清らかで穢れがない境地のことをいいます。修行者は不浄なものを見ない、聞かない、嗅がない、味合わない、触らない、考えないようにして心を清らかにするため、山で修行をする際に「六根清浄」と唱えていたものが、だんだんと訛つて「どっこいしょ」となっていたそうです。現在でも「六根清浄、お山は晴天」と唱えながら山岳修行に励む僧侶もいらつしています。

はじめての仏教

○お釈迦様、悟りを得る

菩提樹の下で坐禅を組み、深い瞑想に入ったお釈迦様が真理に近づいていく中、その邪魔をしようとするさまざまな煩惱が魔物や美女のかたちをとつて次々に現れました。お釈迦様はこうした妨害の中でも心を乱されることなく、魔物のかたちをした煩惱を屈服させ、最後の瞑想に入ります。悟りを開いたのは瞑想に入ってから七日目、満月の日の明け方でした。右手の人差し指で地面に触れた瞬間、襲い掛かっていた魔物たちの姿は消え失せ、お釈迦様はとうとう悟りを得たのです。お釈迦様の仏像の中で、右手の人差し指を地面につけたお姿は、この悟りの瞬間を表しています。出家から六年後、お釈迦様三十五歳の十二月八日のことでした。真理に目覚めたお釈迦様は「ブツダ」と称されました。これはサンスクリット語で「目覚めた者」のことをいいます。お釈迦様がこの時何を悟ったのかについては様々な説があります。非常に重要なことではありませんが、お釈迦様は相手に合わせて口頭で教えを説かれたので、実は正確には残されていないとされています。悟りの中で代表的なのが、物事は原因と結果が互いに関係し合つて成り立っていて、独立した存在はないという考え方の「縁起」です。なぜ生老病死に苦しむのか、苦しみから解放されるにはどうすべきか、お釈迦様は「縁起」の法則によって明らかにしたとされています。